



スポーツボランティアプログラム
 プレ企画
**「東京都障害者
 スポーツ大会
 (陸上競技)」**
 報告

2017/05/27,28
 06/03

東京都障害者スポーツ大会 (陸上競技)

5月27日(土)・28日(日)・6月3日(土)、駒沢オリンピック公園にて「東京都障害者スポーツ大会」の陸上競技が開催されました。本学独自の活動「スポーツボランティアプログラム」のプレ企画と位置づけ、本学からは合計22名の学生が運営ボランティアとして参加しました。

・知的障害部門

5月27日(土)・28日(日)は、知的障害部門の大会で、1日目は受付係を、2日目は競技補助員として、計時係を担当しました。

受付係は、競技者が会場に到着して一番最初に出会うスタッフであると言えます。笑顔でお迎えし、名簿に出席の印を付け、「頑張ってください」と送り出します。コミュニケーションが難しい場合もありますが、介助者の方と話すのではなく、障がいのある競技者と直接話すことを意識して対応していました。

また、計時係は、ゴール地点にて、ストップウォッチでタイムを計る役割でした。学生たちは、「私たちがこんな重要な役割を担当しているのか」と最初は緊張と不安でいっぱいでしたが、プロの審判の方のサポートを受けながら、徐々に慣れていきました。グラウンド上で、競技者の足音や息づかいが聞こえるほど、間近で見ることができ、緊張感を感じながらもとても貴重な経験ができました。

・身体障害部門

6月3日(土)は、身体障害部門の大会で、トラック競技や投てき競技、跳躍競技等、多岐にわたっており、非常に見ごたえがありました。また、競技者の年齢層も、若い方は中学生・高校生、高齢の方だと60歳を過ぎた方もいらっしゃるようにでした。

学生たちは、競技補助員として、計時係と投てき審判員の補助の2つに分かれて活動しました。計時係は、先週の知的障害部門のときと同様、ストップウォッチでタイムを計るのですが、「1位と4位」「2位と5位」など、1人で2人の競技者のタイムを計らなければならないレースがあり、ほとんど差がなく固まってゴールした場合は、かな

り難しい様子でした。また、車椅子競技の場合は、前輪の主軸がゴールラインを割ったときにゴールと計測するのですが、競技用でない車椅子は前輪が非常に小さく、見えづらいため、難易度が高かったようです。

投てき審判員は、メジャーを持って、飛んだ距離を測ったり、記録をつける役割を担いました。視覚障がい・聴覚障がい・身体障がいなど、障がいによって投げ方に特徴があり、下半身に麻痺のある方は腕の力だけで20mも飛ばすなど、自身の使える場所を最大限に活かして投げておられる様子に、学生たちは驚きと感動を覚えたようでした。

・ボランティアに参加した学生の声

- ・ハンディはあるかもしれないが、障がいのない部分でそれを補っていて、身体能力は健常者と変わらないところが多いなと感じました。
- ・理学療法の実習では、病院で障がいのある方と関わっていましたが、今日は、競技者として頑張っている姿を間近で見ることができ、応援する側で力になることができて良かったです。
- ・ルールを工夫するだけで、誰もが参加できるスポーツは、やはりとても良いなと感じました。
- ・もともと障がい者スポーツに興味があったのですが、実際に見ることで余計に興味をわき、もっと知りたいと思ったので、調べたり、また参加したいと思いました。

学生たちは、障がいの有無に関係なく、競技者として自分の持っている力を最大限に引き出し、一生懸命に記録に挑んでいる方々の姿に感動したり、それを可能にするスポーツの魅力を感じることができたようです。

これから、通年のスポーツボランティアプログラムが始まり、様々な競技種目に関わることとなりますが、競技者がより良い結果を出せるように、支えられる知識や技術を学んでいきたいと思います。



受付係の活動の様子

個人で申し込んだか、団体で申し込んだかということ、陸上競技かフライングディスク競技かを確認し、受付を行いました。他大学の学生とも一緒に活動しました。



緊張感漂う計時係

ゴールラインに設置されている階段のような審判台でタイムを計っている様子。プロの審判員と学生ボランティアがペアになり、タイムを計り、遅いタイムの方を採用することになります。プロの審判員と同じタイムになったときには、とてもホッとします。